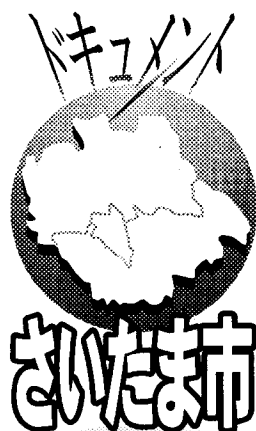


② 環境



第3部 市民参加

師走の寒風の中で、笑顔がこぼれ、歓声が上がった。「大きく育ったね」「これ、おいしそう」

青々と育ったネギとタイコンを次々に大地から引き抜く。浦和市東部にある見沼田んぼの一角に、見沼田んぼ福祉農園はある。ここで、心身障害者デイケア施設の通所生と職員ら十五人が収穫作業をしていた。翌日の調理実習に使うのだという。

見沼田んぼ福祉農園は昨年五月に開園した。県が借り受けた農地を、障害者団体が運営費を払ってまた借りしている形だ。

見沼田んぼ福祉農園は昨年五月に開園した。県が借り受けた農地を、障害者団体が運営費を払ってまた借りしている形だ。

農園わきを流れる小川は濁り、悪臭が漂っていた。芝川の支流、加田屋川だが、生活排水が生態系を変えている。農園代表の猪瀬良一さん(左)が言った。

「この川は浦和、大宮の市境を流れている。合併するなら、まずこの川をきれいにしてみてほしい。浄化を新市の環境行政の指標にしたい」

だが、複雑な表情で付け加えた。「どんな政策を進めようとしているのか、『グレイトさいたま市』の顔が見えてこないんですよ」

見沼田んぼは浦和、大宮、川口の三市に細長くまたがる。広さは約千二百六十畝にのぼる。首都近郊に残された数少ない大規模な緑地帯だ。水田や畑、雑木林が混在、多くは民有地だ。さいたま市域にはうち九五％が含まれる。

見沼田んぼの保全問題は、一九六五年の主に治水上の観点からまとめられた「見沼三原則」から始まる。その後、県と浦和、大宮、川口の関係三市、農業団体代表、学識経

保全の具体策 論議まだ

見沼の大半 新市域に

験者らは九五年、新たな土地利用の基準を策定した「見沼田んぼの保全・活用・創造の基本方針」を打ち出す。県は九三年に「さいたま環境創造

基金」を創設、九六年から三市も積み立てに参加して保全に乗り出した。これまで県が七十億、三市が約四十一億円を積み立てた経緯がある。

さいたま市ができたなら、緑地保全はどうなるのか。新市の建設計画は見沼田んぼを「良好な自然環境の保全と創造のシンボル地域」と位置づけている。その上で、斜

面林の公有地化や農業の維持、公園づくりなどを盛り込んだ「見沼グリーンプロジェクト」の推進を掲げる。これまでの県主導から、将来的にはさいたま市の担う役割が徐々に増していく、と見られる。

このほかに、見沼田んぼのさまざまな未来像が語られている。湿地を保全する県ウエットランド事業、ビオトープ構想……。しかし、どれも具体化していない。

見沼田んぼをとりまく市民の活動や思いに、さいたま市はどう耳を傾け、施策に反映させるのか。農業が衰退し、都市化が進む中、広大な緑地帯の将来は新市の姿を占う。「結局、新市長の考え方で大きく左右されることになる」。猪瀬さんは、西方にそびえ立つさいたま新都心のビル群を眺めながらつぶやいた。



見沼田んぼ福祉農園で収穫作業をする施設通所生たち。西の遠方にさいたま新都心のビル群が見える。浦和市南部領土で

乱開発域に 広がる緑地

環境保護団体「見沼田圃保全市民連絡会」の代表で浦和市議の村上明夫さん(左)は、

「さいたま市ができたなら、緑地保全はどうなるのか。新市の建設計画は見沼田んぼを「良好な自然環境の保全と創造のシンボル地域」と位置づけている。その上で、斜